

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01905

研究課題名(和文) ガリラヤ地方とレバノンのキリスト教徒によるアラブ・ナショナリズムの再考

研究課題名(英文) Rethinking of Arab Nationalism by the Arab Christians in Galilee and Lebanon

研究代表者

菅瀬 晶子 (Sugase, Akiko)

国立民族学博物館・超域フィールド科学研究部・准教授

研究者番号：00444141

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀前半のパレスチナ・アラブ人キリスト教徒ジャーナリスト、ナジブ・ナッサーとイーサー・アル・イーサーの1910年代～20年代の著作を収集・通読し、その当時における影響力と今日的意義を検証した。パレスチナ・アラブ人の宗教の別を越えた連帯と農業活性化への希求が両名の主張の特徴であるが、その根底には教会への不信感があり、ことにその傾向はアル・イーサーに顕著であることがわかった。今日の教会と信徒の関係にも、彼らの影響が見て取れる。
なお、本研究で同じく検証対象に挙げていたグレゴリオス・ハッジャー大司教については、期間内に有効な資料(当人の手記)を発見することはできず、今後の課題とした。

研究成果の概要(英文)：Najib Nassar and 'Isa al-'Isa, the vanguards of Arab Nationalist journalists born as the Palestinian Christians, shares the two mutual points throughout their works; appealing the solidarity of Muslims and Christians and the encouragement of the local agriculture. These characteristics are based on their sense of distrust against the Churches (especially the Greek Orthodox Church) ignorant to the crisis of the Palestinians, more remarkable on al-'Isa's vision. Their point of view forecast today's internal dispute between the mainly-Greek ecclesiarches and the secular Arab Christians in Palestine.

研究分野：中東地域研究

キーワード：アラブ・ナショナリズム キリスト教徒 パレスチナ イスラエル

1. 研究開始当初の背景

現在パレスチナにおけるアラブ/パレスチナ・ナショナリズム研究は、その成立過程からシオニズムあるいはイスラエルとの対峙という文脈でのみ語られがちである。しかしながら、その初期における担い手の多様性や主張の背景は、今日のパレスチナ社会の指標とすべきであった要素を多分に含んでおり、またパレスチナという地域の枠組みを超えた、普遍性を持っている。

そこで本研究では、初期における担い手であったキリスト教徒に注目し、パレスチナ国家という枠組みを超越した、アラブ人アイデンティティのめざめと将来への展望を重視した彼らの活動を再検証することとした。

2. 研究の目的

オスマン帝国時代末期から英国委任統治時代のパレスチナにおけるアラブ/パレスチナ・ナショナリズムの潮流において、キリスト教徒が果たしてきた役割を検証することが本研究の目的である。本研究ではナジブ・ナッサーとイーサー・アル・イーサーに的を絞り、農業振興と男女同権運動、アラブ人アイデンティティをめぐるギリシア正教会との対立関係から、その背景をあきらかにする。また、ナショナリズム研究において彼らの存在感は今日希薄であるが、なぜそのような状況に陥っているのかを、シオニズムとの対峙に囚われるあまり、より広い視野での将来への視点を持てなかったパレスチナにおけるナショナリズムへの批判という立場であきらかにする。

3. 研究の方法

ナジブ・ナッサー主筆のアル・カルメル、イーサー・アル・イーサー主筆のフィラスティーン両紙の1910年代～20年代の記事と、ナジブ・ナッサーの書簡集、著作を収集し、その主張と背景を検証した。この年代に限定した理由は、両者がもっとも活発に執筆活動をおこない、当時のパレスチナ・アラブ人コミュニティに影響力を持ちえたのがこの時代であるためであり、1930年代以降の彼らの活動の基礎はすべてこの時代に築かれているためである。ことにナッサーは1920年代以降、周囲の期待に反し、政治とのかかわりをほぼ断ち、ガリラヤ地方の農村部における社会開発、農業振興へと活動の軸を移してゆく。1930年代以降のアル・カルメル紙は、彼よりも彼の妻である男女同権運動家サーズィジュ・ナッサーに移行してしまうため、彼の思考の流れをみるためには1920年代までを重視すべきであるという判断に至った。

4. 研究成果

資料を精読することにより、キリスト教会と信徒への不信感が、ムスリムとの連帯を重

視した両者の活動の根底にあることがあきらかになった。しかしながら、キリスト教徒の家庭に生まれ育ったことと、彼らの先見性は密接にかかわっており、アラブ人キリスト教徒アイデンティティが皮肉なかたちで結実したものといえる。この時代にすでに生じていた教会と一般信徒の乖離は、現在もなおアラブ人キリスト教徒社会を蝕んでいる。その最たる例が2000年代にあきらかになった、ギリシア正教総主教による教会所有地の売却計画と、2010年代のイスラエル政府によるキリスト教徒徴兵問題である。前者は総主教の辞任という異例の事態を招いたが、現在進行形で続いている問題であり、教会と一般信徒の乖離をより深刻なものにしている。後者もまた、ギリシア正教会の一部聖職者による消極的な態度が、一般信徒からの厳しい批判にさらされている。過去の問題を精算できぬままにシオニズムとの対峙に突入してしまったことの、負の遺産がここに集約されている。

また、彼らキリスト教徒アラブ・ナショナリストは、ごく初期のうちに中東系ユダヤ教徒のシオニストとかがわりと持っていたことが判明した。ナッサーはガリラヤ地方の土地売買をめぐるシオニストの入植者と接触し、このときの体験が彼を反シオニズムへ向かわせる契機となったが、アル・カルメル紙に中東系ユダヤ教徒シオニストの寄稿を受け付けた時期もあったことから、決して反目していたという訳ではないことがわかる。イーサーもまたフィラスティーン紙に同じ中東系ユダヤ教徒シオニストに連載記事を依頼している。当初は共通の関心事である農業振興によって接触を持っていたと考えられる。しかしながらほどなくして、中東系ユダヤ教徒シオニストが運営にかかわっていた、ユダヤ教徒経営の農学校におけるアラブ人学生受け入れをめぐる、激しく対立してゆく。まずはシオニズムの体系を学び、適用できそうな理論は取り込みつつ批判に転じるという姿勢が、ナッサーにもイーサーにもみられる。これは、既存の研究ではあきらかにされてこなかった点である。農業への関心の高さは、ムスリムよりもキリスト教徒のアラブ・ナショナリストに顕著な特徴であり、ことにナッサーとイーサーの活動に、その傾向が色濃くみられる。しかしながらそれも彼ら独自の発想ではなく、シオニストと接触することで学びとったことがわかる。独学の末にナッサーは農業の指南書まで著しており、いうまでもなくパレスチナ初のアラビア語での農業専門書である。今日みても非常に専門性が高い内容であり、これもシオニズムから学びとったことの、パレスチナ・アラブ人コミュニティへの還元ということができよう。また、農業こそがパレスチナを代表とする生業であるという認識は今日も根強く、パレスチナの民衆といえればそれは農民のことである。その萌芽はアラブ・ナシ

ナリズムにあり、ことに農業振興に熱心であったナッサルとイーサーの功績であるといえる。

現在発表済みの論文は、いずれもナッサルやイーサーの主張が忘れ去られた現状への批判という前提で、準備段階として執筆されたものである。2000年代の土地売却問題、2010年代のキリスト教徒徴兵問題については、それぞれ雑誌論文の2と3で扱った。また、アラブ人キリスト教徒コミュニティにおける農業の重要性と、イスラエル建国以降に加えられている農業に対する直接的・間接的規制の影響が、キリスト教徒の食文化にまで大きな影響を及ぼしていることについては、雑誌論文1、図書1で詳しく扱った。

ただし、膨大な分量である両者の著作を網羅することは3年間では難しく、成果となる論文は現在準備中である。今後2年以内に発表予定である。研究を進める過程で、キリスト教徒アラブ・ナショナリストへの現地コミュニティにおける関心は、当初の予定よりもはるかに低いことが判明した。このため、当初はデータベース構築を視野に入れた資料収集をおこなっていたが、途中から論文執筆のみを目標とすることに変更した。

さらに、当初扱う予定であったメルキト派カトリック大司教のグレゴリオス・ハッジャーについては、本研究開始前の段階で情報を入手していた資料の所在を確認することができず、詳細な研究をおこなうことができなかった。彼についての調査は、ギリシア正教徒コミュニティとのかかわりが大きかったナッサルやイーサーとの比較対象として、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

1. 菅瀬晶子「パレスチナ自治区・ヨルダン川西岸地区とイスラエル・ガリラヤ地方における豚肉食の現在」、国立民族学博物館研究報告 40 - 4、619 - 652 頁、2016 年。査読なし
2. 菅瀬晶子「パレスチナ・アラブ人アイデンティティの回復 イスラエルのキリスト教徒徴兵問題」、『現代宗教 2016』、77 - 98 頁、2016 年。査読なし
3. 菅瀬晶子「イスラエルのアラブ人市民の政治参加」、ユダヤ・イスラエル研究第 29 号、23 - 34 頁、2015 年。査読なし

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 2 件)

1. 阿良田麻里子 (編著) 『文化を食べる、

文化を飲む グローカル化する世界の食とビジネス』、ドメス出版、全 320 頁、2017 年。

うち担当箇所：

- 菅瀬晶子「第 3 部第 2 章 パレスチナ・イスラエルのアラブ人キリスト教徒にみられる食文化の特徴とその影響」、267 - 278 頁。
2. 臼杵陽・鈴木啓之 (編著) 『エリア・スタディーズ 144 パレスチナを知るための 60 章』、明石書店、全 394 頁、2016 年。

うち担当箇所：

- 菅瀬晶子「第 4 章 パレスチナ人は何を食べているのか オスマン時代から続く伝統的食文化」、32 - 36 頁。

- 菅瀬晶子「第 5 章 パレスチナのイエと社会 パレスチナ人のアイデンティティ」、39 - 43 頁。

- 菅瀬晶子「第 6 章 キリスト教徒として生きる人々 多様な宗教文化」46 - 50 頁。

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況 (計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菅瀬 晶子 (Sugase, Akiko)

国立民族学博物館・超域フィールド科学研究部・准教授

研究者番号：00444141

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者 ()